巻頭言

「生活科学」とは何なのか

星　野　晴　彦
（生活科学研究所　研究部主任）

文教大学付属生活科学研究所が設立されて以来、30年余が過ぎた。そして、「生活科学研究」も本集で34集となった。今自分自身がこの生活科学研究所に関わらせて頂きながら、本当に多くの方々の熱意と努力の蓄積が、この研究所をここまで支えてきたのだと実感している。

ただ、ふと考えさせられるのは、私たちが今当然のように口にしている「生活科学」とは、そもそも何なのであろうか。実は、そのようなことを深く考えることも無いが、明らかにしえていないところがあるのではないだろうか。私たち人間が生きているところ、至るところに生活がある。それを反映してであろうが、本集に掲載した論文を見ると、その内容や領域は生活科学の基本である家政学に加え、社会学、社会福祉学、教育学、心理学など、多岐にわたっている。

また、内容や領域の広さがあることに加えて、時間の経過によって変化するものと変化しないものがあることも見逃してはなるまい。

変化しないことの一つは人間の生活を考えるに当たり、一つの学問領域では完結しえず、それぞれの学問領域を超えた議論が必要になるということである。それは、本質的に変わりが無いのである。他方で変化したことでは、今年度研究プロジェクトの一つとして取り上げられている「男女共同参画」に関してである。男性が育児に積極的に参加するように支援する社会情勢は、誰が想像しえたのであろうか。父は仕事でほとんど子育てに関われないことが、かなり最近まで当然視されていなかったであろうか。そうでない生き方に対して、違和感を持ってみてきたのではないだろうか。「イクメン」を支援する企業の存在など、かつて想像しえたであろうか。

改めて「生活科学研究」のタイトルを見直して、「生活を科学する」ことの、深さと広さ、そして時間による変化の有無という、複合性を感じさせられる。多くの先輩たちが作り上げてくださった「生活科学研究」の蓄積に甘えることなく、私たち自身が生活の複合性を、科学の目で真摯に見つめ続ける必要があるのではないだろうか。